



世界の紡ぎ方

徳久 聖奈

「こんにちは」より「今日何食べた？」の方がマレーシアでは挨拶として親しまれているらしい。研修前の自分には正直なところ、挨拶どころか、国際協力に携わる方々が言葉も文化も異なる地で何を原動力として励んでいるのか、わからなかった。

その中、訪れた先々で、国際協力の現場が一人ひとりのパッションによって支えられていることを知った。例えば、国際協力とは、異国の地でアニメ好きな男の子に日本語を教えようというローカルな視点に支えられている。あの時、村にいたお母さんが、言葉も通じない私の手をとって伝統的なヤシの葉の編み方を教えてくれたように、小さな働きかけで世界は繋がっていく。

「一緒にもぐもぐしましょ」と、現地校交流の際に聞こえた予想外の可愛い日本語が嬉しくて心に残っている。高校時代にクラスで歓迎した留学生のことを思い出した。自分たちはこれほどのおもてなしができていただろうか。

現場では、技術開発や資金援助のほかに、彼らのことばに耳を傾け、個として対話することで生まれる輪を体感した。他を尊重し、それに習う姿勢が私たちを結んでいた。これこそが原動力であり、多文化社会を未来に紡ぐヤシの葉なのだろうか。今度は自分が、明日ちょっとしたことで、あるいは何年もかけたその先で、きっと世界をつなぐ番だ。

次にマレーシアに行った時に使うと決めている言葉がある。それが私にとっての世界を紡ぐ、第一歩になるかもしれない。Jom makan!